

I 経営の重点に関わること 評価段階(A:よくできている B:おおむねできている C:あまりできていない D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	関係者評価委員から	改善策(来年度の具体的な取り組み目標等)
いきいきと いっぱい 遊ぶ子	認められ 自信を持つ	失敗しても大丈夫と安心感を与えるような保育者の態度や肯定的な言葉がけをしている	保育者に心を寄せて生活し、気持ち安定している。保育者が一人一人の複雑な心に寄り添い、丸ごと受け止めてきたことが、肯定的な見方となり、肯定的な言葉がけが増えてきた。	A	A	・自由に楽しくやっているなあという感じがする。「〇〇しちゃダメだよ」ではなく、「どうしたの?」と寄り添い、その子の気持ちを丸ごと受け止めてきた取り組みが感じられる。	・子どもの行動には理由がある。大人都合で「〇〇しちゃダメ」ではなく、子どもにとってどうなのかを考え、「どうしたの?」と寄り添い、その子の気持ちを尊重し、自分で判断する姿を支えていく。
		結果だけではなくそこにたどり着くまでの過程を認めている	遊びの表面的な形を捉えるのではなく、「先程より」「昨日より今日」の変化を捉えようとする意識が高まってきているが、育ちや学びの「ここだ」という瞬間を見逃してしまっていることが多い。	B	B	・保育を参観して、子どもたちの家庭での生活経験(キャッシュレス決済、セルフレジ、マイバック、お医者さん等)を大切にし、遊びに取り入れる努力が見られる。子ども目線で遊びの環境を構成しているため、自信をもつやすい。	・「〇〇して遊んでいるな」と漠然と子どもの姿を捉えるのではなく、子どもと同じ目線に立ち、子どもと共に遊び、楽しいを共に感じていく。「先程より」「昨日より今日」の変化を見逃さないようにする。
		やってみよう、もっとやりたいという姿に直ぐに応える環境の再構成を行っている	園児は新しいことにもチャレンジし、意欲的、かつ主体的な姿が見られている。「やりたい」「もっともつとの気持ちや「遊びに全力」「満足」「達成感」に応じた環境構成が追いついていない課題を感じている。	B	A		・子どもが大事にされていると思える雰囲気や配置、季節感のある環境、与える環境と創り出す環境を構成する。遊びの一步先を予想していくようにしたい。

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	関係者評価委員から	改善策(来年度の具体的な取り組み目標等)	
1 こども園 における教育 及び保育		(1) 0歳から小学校就学 までの一貫した 教育及び保育	子どもの発達や集団生活の経験年数を考慮し、一人一人の状況に応じた柔軟で応答的な援助や環境を整えている	年中からの転入園が多いという特色に応じ、夏から年長、年中クラスを2グループに分け、15人前後の小集団の中で生活してきた。個々に丁寧な対応ができる場が増え、一人ひとりの良さが情報共有できるようになった。	A	A	・クラスを2グループに分けて運営したことで、パーソナルスペースがきちんと確保されたのではないかと、結果、怪我も減っている。良い成果があらわれている。	年中からの転入園が多い特色を、互いの経験の違いが良い刺激として響き合い、安心安定して過ごせるようにしていく。落ち着いて自分の遊びがじっくりできるよう、パーソナルスペースを保てる小集団での生活を保障する。
		(2) 一日の生活の連続性 及びリズムの多様性 への配慮	一人一人の生活の流れを意識し、安心して穏やかにつるぎる場や時間を工夫するなど、安定した生活が過ごせるよう援助している	前後の園児の様子を伝え合ったり、対応する保育者を変えてみたりして、園児が育っている力を感じ、自身で調整しようとする姿を支えてきた。朝(早番)から帰(遅番)までのそれぞれの時間帯で、保育者の意図ある環境づくりが必要。	B	B	・不適切な保育のあり方を園全体で検証している。「〇〇しないよ」「〇〇できないよ」は脅迫、脅し⇒「〇〇したら〇〇しようね」これも言い方、状況によっては指示、誘導になる場合もある等、虐待の一手間の段階に対して声を出し、確認している体制を今後も続けてほしい。	教育・保育時間外である、朝(早番)や帰(遅番)の時間帯の環境においても、そこであるもので遊ばせ、遊び出すことで安心してしまいうのではなく、家庭的な雰囲気を感じられる環境を保育者の意図をもって構成する。
		(3) 環境を通して行う 教育及び保育	子どもの姿から興味や関心を理解し、明日の教育保育に具体的な願いを持ち遊び環境を工夫する	保育者の概念で遊びを捉えたり展開したりしていないか、本当に保育者は子どもたちの思いに寄り添っているのかと、子どもにとってどうなのかを考える必要性を感じ、日々の自身の保育を反省している。	B	B		子どもを出発点にして保育しようとする保育者の意識改革を行動に移していけるようにしたい。そのために、子どもの心の変化を瞬時に捉え、「もつと」につながっていく関わりをしていく。
2 安全管理・ 指導	(1) 事故防止・防災	「なにこれ?」「あれ?おかしい」「これって大丈夫?」の気付きが示され、安全対策が実施された。園児自ら安全な行動の仕方が身につく関わりを行っている	安全管理では職種関係なく当事者意識をもち、声を出し、気付いたら即行動していくようになった。また大人の都合で「良い」「悪い」のルールを押しつけるのではなく、どうしたら安全に遊べるのか子どもと具体的な方法を考え判断するように職員皆で取り組んだ。怪我は3分の1に減った。	A	A	・今回の災害で、2日間(土曜日)の給食、おやつを備蓄対応できたことは、地域も見習っていきたい。今後、地震による災害が起こった場合には、全てのライフラインが止まってしまふことを想定した備蓄の準備をしていかなければならない。	大人の都合でルールを押し付けたり、〇×の2択で判断させたりするのではなく、どうしたらこれが実現できるのか考えようとする姿を生かし、子どもと一緒に具体的な方法を考え、「子どもにとってどうなのか」を基本においた判断をしていく。	
3 保健管理・ 指導	(1) 健康教育の充実	健康に生活する習慣や態度が身につく、見通しを持って行動できるよう援助している食への関心が持てるよう保育教諭と調理員が協力し食育活動に取り組んでいる	調理員と共に、安心安全、発達や個々に応じた(内容、食材、刻み方)食の提供ができていた。災害時に、アレルギー児等の突発的な対応に対しても連携を取りながら進められた。	A	A		衛生面の習慣化、日々の保育につながるものを食育活動として取り入れる等して日々の保育の充実を生かす。食事の様子や食育の日の内容を保護者に知らせたり、保護者にレシピを伝えたりし、食への関心を広げる。	
4 特別支援 教育・保育	(1) 支援体制づくり	一人一人に合った支援計画を立て、多くの職員が参加できる園内研修を工夫し、支援方法を学び合っている	個々の表情や生活や遊びの経過がより視覚的にわかるように、支援計画(サポートプラン)のファイルに記録写真を加える等して、保護者や訪問支援員と共有してきた。支援方法が発達にあっていくかを丁寧に確認し、会議の中で共通理解している。	A	A		パンダ会議でのサポートプランの検討をより確かな内容にするために、支援児同士の交流を行い他の支援児の育ちを共有する。ファイルに記録写真を加え、通級施設や訪問支援員と園での生活を共有する。また、通級施設を見学し、意見交換を通して共通の関わりをし	
5 組織運営	(1) 組織体制の充実	職員が互いに連携を取り、自分の役割を自覚し、責任を持って行っている	組織内でのそれぞれの役割は明確になっているが、組織運営において当事者としての意識が低く、見通しが甘かった。居心地の良い人間関係の良さに甘えて他人任せ、意思疎通のズレから、全体の遅れとなってしまうことが度々あった。	B	A	・様々な職種や勤務体制がある中、それぞれの職種単位で意見交換し、全職員の意見を反映する体制ができていた。また、この園の子どもたちのためにみんなで考えようとする組織になっている。行事等で遅れが生じた課題は、個人の問題でもあり、それをカバーしている園体制ができていたので、組織運営はA評価に値する。	各自が一步先まで見通しをもち、考えを明確に説明し、状況判断しながら責任をもって取り組み、協働していく。また、職種や立場関係なく自分の考えを明確に提案でき、相手のために寄り添える職員集団を目指す。	
6 研修	(1) 研修体制の充実	遊び構想や研修テーマを基に園内研修で意見を出し合い、環境及び援助の方法を深めている	意見や疑問、悩みを素直に、気軽に話せる研修体制により、自分の心に落ちる学びを得ている。また、園児の課題が改善され、成長が見られている。引き続き、学びんだことを繰り返して継続、再確認が必要。	A	A		「わかったつもり」「できたつもり」になってしまわないように、学びを継続、再確認していくようにする。研修テーマや手だてに立ち返りながら「その人」「その時期」に応じた研修を組み立て、自分たちの言葉で自分たちの学びを生み出していく。	
7 教育・ 保育環境整備	(1) 教育・保育の充実	遊具や用具が整理整頓され、子どもが扱いやすく安全に遊びを楽しむことができるような環境を整えている	子どもが自分で選んで遊んで片付けられるように、わかりやすい表示をつけたり、園庭倉庫を開放したりした。園児は習慣化してきた。職員は整理整頓、片付けの見届け、確認、伝達、子どもたちのための保育室環境は引き続き行う。	B	A	・園児が遊びやすく、片付けやすい環境については、文字だけでなく絵や写真も含めた表示がされている。また、とつき棚もクラス別のスペースが確保され、子どもたちに寄り添おうとする変化が見られた。	大人のためのスペースではなく、園庭、保育室共に園児の発想、遊びの展開に対応し、子どもたちの遊び環境となるようにする。また引き続き、全職員で整理整頓、片付け後の確認伝達を実践する。	
8 家庭との 連携・協力	(1) 家庭教育への 支援機能の充実	子ども心の動きや育ちと保育教諭の思いを日々のボードやお便りで発信している	抽象的な表現と同じ内容、「楽しかった」「かわいかった」でまとめられていることが多かったため、子どもの姿の分析、タイトルのつけ方、写真や吹き出しの活用を研修していった。まずは、日々子どもの姿をしっかり捉えたい。	B	B	・ボードやおたよりについては、もつと子どもたちの様子がわかる内容になると嬉しい。	遊びの面白さを見抜けるよう、深く子どもの姿を読み取り、マンネリ化しない発信をする。写真入り、目を引くタイトル、吹き出しの活用等、形にとらわれず工夫し、わかりやすく見やすく、保護者に子どもたちの様子がわかるボードやおたよりにする。	
9 近隣の学校 との連携	(1) 近隣の園との 連携の推進	近隣園、学校と公開保育や公開授業に参加し合い、子ども同士が交流して楽しむ機会を通して互いの情報交換を行っている	コロナ禍ではあったが、保護者「特別支援学級の見学」、職員「入江学区区合同研修会参加」、園児「入江小学校交流会」、「幼小接続公開保育参加(3校の申込)」、「杉の子保育園との交流」、「特別支援学級体験」及び情報交換を行った。	A	A		情報交換、意見交換、公開保育、公開授業参観等、入江小、江尻小、浜田小との関係性を深めていく。年長児に限らず、園児が、遊具、運動場、栽培物、自然物、掲示されている絵等、刺激を受けられるよう、日頃から小学校に訪問する。	
10 地域との連携	(1) 信頼される 園づくり	地域の行事に参加したり、地域の社会資源を活用したりして、子ども達に本物と出会う機会を作っている	年長が神輿を作ったのを見た地域の方が、本物の神輿を貸してくださり、園児の生活、遊びが充実した。その他、年少がかぶの種を買いに地域の八百屋に出掛ける等、少しずつ地域との交流が再開した。	A	A		地域の社会資源を活用し、商店街、保護者の仕事、交流館、公園、神社等、繰り返し訪問し、直接見る、本物に出会う(触れる)、話す機会を積み重ねていく。また、コロナ前に実施していた「遊びリレーション」「独居老人触れ合いの会」が実施できるように計画する。	